



世界平和につながるころ

秋田県立湯沢高等学校 3年 成瀬 流奈

ラオスの朝は托鉢から始まる。それは市街地全体が世界文化遺産に登録されているルアンパバーンも例外ではない。1日も休むことなく夜明けと共に行われる托鉢は、仏教の大切なお勤めのひとつである。托鉢に用いられる供物は、基本的に蒸した米で、それは寺院に持ち帰られた後、丸い形に乾燥され、煎餅になる。これが保存食になるという。ここ、ルアンパバーンでは橙色の袈裟を纏った何百人もの僧侶が托鉢を行うわけだが、蒸した米をお供えするのは主に地元の人々であり、観光客は皆、お菓子をお供えする。観光客が多いルアンパバーンではその量も半端ではなく、たくさんの僧侶をもってしても受け取りきれない。それで、道端のそこに写真のようなバスケットが置かれており、僧侶たちは持ちきれなくなった供物をここに入れる。そのため、このバスケットの側面にはラオ語と英語で「ゴミではない」と書かれていた。この供物が貧しい人々に分け与えられるため、物乞いをする人は殆ど見受けられない。托鉢は1時間弱行われるが、時期によってはこのバスケットにあふれんばかりの供物が集まるそうだ。日本では不特定多数から集められた食物なんて毒物混入の恐れがあるなどと問題視されるだろう。しかしラオスでは助け合いの精神が浸透していて、助けるのも助けられるのも当たり前のことであり、そこに疑いの気持ちはない。疑うことなく自然な形で助けたり助けられたりすることが、とても羨ましく感じた。そして、この精神こそが世界平和の第一歩につながるのではないかと、思う。